

「ホームホスピス®」のケアを、すべての介護現場の基準に

自宅の雰囲気のある民家でなじみの家具や物に囲まれ、自分のことを理解してくれるスタッフがそばにいて、そのような安心して居られる場所でどんどん元気になっていく入居者さんたちのようすに、あらためて人間にとって大切なものは何かを再認識させられました。

ホームホスピス「かあさんの家」のような住まいが、私が住む地域にもあったら、すてきだなと思いました。

ゆきさんは人間にとって大切なものは、「安心できる居場所」、「味方」そして「誇り」と教えていただきました。「かあさんの家」は、この3つが揃っているところだからこそ、安心して自分らしい最期を迎えることができるのだと感じました。

「かあさんの家」の介護の基本を作ったラワーセン・いつみさんの紹介がありましたが、とても考えさせられました。せっかくデンマークで介護を学んだのに、日本の施設ではそれが生かされないことに苦悩されていたということですね。日本の多くの介護現場は、今も同じような現状がみられるのは残念なことです。

個別ケアの重要性は、専門学校やヘルパー講習などで教えられます。しかし、それが現場で実践できていないのはなぜか。たんに人手不足のせいなのか？

私の経験では、それは違うように感じられます。私はかつて開設したばかりのグループホームで働いたことがあります。そこで認知症ケアに長く携わっていた同僚から、それまで勤めていた老健で、「当たり前」だと思ってきたケアが誤りだったことを思い知らされました。

「ここは施設じゃないのよ」とよく指摘されました。個別ケアとは何かを、目の前で実践して見せてくれたことは、その後、私がケアマネジャーとなって利用者さんのケアを考えるときも大きな影響を与えています。

多分、この同僚に出会わなければ、私は「ご本人に合わせたケア」について考えるチャンスがなかったかもしれません。

よいモデルとなる実践を、現場で見て体験するチャンスが必要なのだと思います。

市原先生の法人では、ホームホスピスの学校を開設されているということですが、ホームホスピスだけでなく、一般の介護現場の人たちにも「かあさんの家」のケアを体験してほしい、そしてそれまでの自分が行ってきたケアに対する価値観をひっくり返す体験をしてほしいと思いました。

今後のご活躍をお祈り申し上げます。貴重なお話をありがとうございました。